

大乘院四季真景図の世界

—新出絵画資料の紹介を兼ねて—

はじめに 名勝旧大乘院庭園は15年に及ぶ発掘調査・整備を経て2010年度より一般公開が始まった。調査や整備の過程では大乘院庭園を描いた絵画資料が大いに参考にされてきたが（『年報 2000 - III』『紀要 2001』『紀要 2002』『紀要 2004』など）、本稿では2011年に当研究所の所蔵となった新出の作品とともに、これまで参考に供されることのなかった国立国会図書館所蔵本について、その調査成果を踏まえて紹介したい。

新出資料の紹介 最近市村に見出され奈文研所蔵となった大乘院庭園を描く絵画作品について紹介する。まず画面を見ることとしよう。

本図（巻頭図版2）は大池を中心とした大乘院庭園を西の上空より俯瞰して描く。画面手前は西にあたり、御殿の屋根だけが見え、その前にカキツバタが咲く西小池を描く。画面向かって左手の北は高台となり、鐘楼・鬼園亭・弥勒堂・観音堂などの建物が紅葉に包まれる。画面奥は東方で、大池の東岸には桜が咲き、遠方に若草山、御蓋山、高円山と思われる山々を望む。右手は南で、大池に三ツ島が浮かび周囲には水鳥が群れる。右手前は松や湛雪亭に雪が積もる。

画面向かって左に白文方印2夥「有隣之章」「懷徳堂」を捺す。外題墨書銘「大乘院御門跡御筆」。絹本着色、軸装。法量は画面縦55.0×横70.4cm、表装は縦135.7×横75.3cm、軸長80.9cm、軸径2.7cm。伝来不詳。

落款にみられる「懷徳堂有隣」は藤田祥光『大乘院』によれば隆温の茶人としての号という。隆温は幕末の大乘院門跡で、養嗣子隆芳の代に維新を迎えて大乘院は廃絶、隆温は隆芳とともに還俗して松園氏を称し男爵に列せられている。隆温の大乘院庭園図はすでに2例が知られているが、本作品も隆温の作と認めて良いだろう。これまでに知られる隆温の作例中最大の作となる。画面の大きさに関わらず、草木や鹿など細部の表現にも手を抜かず描ききる手腕は決して素人の手になるものではない。職業画家としての技巧は見られないものの、隆温が近世後期京都画壇を代表する原在中あるいは原在照に師事したとする伝承も首肯される出来栄で、明るい画面は原派の流れを汲むものと見て差支えないだろう。



図77 隆温筆 大乘院四季真景図

本図は大乘院廃絶以前の庭園の姿をとどめるものとして、また、門跡自身の手になる作品としてその資料的価値はきわめて高いと評価することができる。

門跡の描いた大乘院庭園 これまでにも隆温作と見られる大乘院庭園図が確認されており、名勝旧大乘院庭園の復元・修景・整備において参考とされてきた経緯があるが、いずれもすでに紹介されているので、ここではそのうちの一例のみ図版を掲げて比較検討に供する。

本図（図77）は現在興福寺に蔵される隆温筆大乘院庭園四季真景図である。大乘院庭園を西上空より俯瞰し、画面に四季を描きこむ。画面の法量は縦23.8×横37cm。落款2夥「懷徳堂」「有隣之章」を捺す。森蘊旧蔵品。

画面は小さく、描かれた内容は新発見の奈文研本とほぼ同様だが、所々の名所に名称の書きこみがある。左手前から延びる御殿の縁側や中島へ延びる廊橋など、構造を理解していない様な描写がまみられるのは、実際の建物を描いたというよりも手本を模写した結果のようにも見受けられる。先に見た奈文研本は廊橋の端部を霞で隠すなどの効果的な技法を用いており、絵画としてはより成熟した感がある。したがって、興福寺本は奈文研本に先行する作品と見るべきだろう。

大乘院八景 これらの大乘院庭園図に共通する特徴は、一画面に四季を描きこむことである。四季が連続していないことに気づかされるが、これは「大乘院八景」を画中に詠み込むことを優先したことによると考えられる。いくつかの資料から知られる大乘院八景とはすなわち、①遣経閣の花、②観音堂の藤、③飛鳥山の晩鐘、④鬼園亭の夕照（または鬼園山の驟雨）、⑤枕坂の紅葉、⑥中島の秋月、⑦湛雪亭の晴景、⑧三ツ島の水鳥の八景を指す。①と②は春、③と④は夏、⑤と⑥は秋、⑦と⑧は冬の景物である。国立国会図書館所蔵「南都大乘院林泉八景团扇図」では上記八景に加えて「柳橋」と「小池ノ杜若」も名所として描いており、これらの景物も八景に準じて好まれたようである。四季と結びついた八景を描いたために、画面中の季節は連続性を持たないのだろう。重要なのは画面に八景を再現することであり、庭園のありの

ままの姿を写生することではなかったのだ。つまり、大乘院四季真景図と呼ばれる一連の作品群は大乘院八景を描くことを目的としていたとみるべきであり、いうなれば「大乘院四季八景図」なのである。大乘院八景についてはその成立の時期や選定者など定かでないことが多く、今後あきらかにしなければならない課題ではある。

明治の大乘院庭園追憶　ところで、大乘院庭園を描いた絵画資料としては現在奈良ホテル所蔵の作品がつとに知られている。「元大乘院庭苑四季眺望真景」と題されたこの作品(図78)は銘記に「旧臣宮崎春翠模図」とあり、題記の「元大乘院」とあわせ考えて、大乘院廃絶後すなわち明治以降に宮崎豊広(春翠)によって描かれたことがあきらかとなる。また、「模図」と記すことから原本の存在が想定され、大乘院庭園を西上空から俯瞰し、四季を描きこむ構図は隆温筆本とも共通することから、さきに見たような隆温筆本を写したものと考えられてきた。

実はこの宮崎の手になる作品が国立国会図書館にも所蔵されている。本作品についてはこれまで触れられることがなかったようなので、ここで簡単に紹介しておきたい。

本図(図79)も画面内容はこれまでに見てきた作例と同様である。紙本著色、法量は縦79.0×152.5cmの大画面。注目されるのは画面向かって左の朱書銘である。

「明治廿六年。我承奈良公園經始之委嘱。往而經紀之。画工宮寄生。日々来吾寓／居。而画公園景趣図案。一日出其師原在照所描大乘院苑図。見余。即命臨模焉。／蓋宮寄生旧大乘院門主之臣也。故此苑之事。則心印肝銘。為吾補描原図所欠／者。以作此図云。此月念八日。図成。仍書餘白。東京醉園居士小澤圭識(朱文方印)『醉園』」

この銘記は明治の庭園史家小澤圭次郎によるもの。小澤はかの松平定信の作庭になる欲恩園内に生を受け、維新以来廃れていく大名庭園の行く末を案じて各地の庭園資料を残そうと奔走した。小澤によって蒐集された資料は現在国会図書館が所蔵するが、膨大な庭園資料群の全貌はいまだあきらかにされていない。

原在照本のゆくえ　さて、この銘記中とりわけ注目されるのは、この図の制作の由来である。奈良公園造営の委嘱を承けて奈良にいた小澤に宮崎が師である原在照が描いた大乘院庭園図を見せたところ、小澤が宮崎に模写を命じてできたのが本図だという。つまり、本図は宮崎の



図78 宮崎春翠筆 旧大乘院底苑四季眺望真景



図79 宮崎春翠筆 南都大乘院林泉真景(国立国会図書館提供)

オリジナルではなく、原在照の大乘院庭園図を明治26年(1893)に模写したものなのである。ここに原在照筆本の存在があきらかとなるとともに、これまで隆温筆本を模したのと考えられてきた奈良ホテル本はもとより、おそらくは隆温筆本の本歌も原在照筆本であろうことがあきらかとなった。原在照は近世後期に活躍した京都の画人で、原派の3代目。安政度の内裏造営に際しては障壁画を描いたことが知られ、春日絵所職の株を取得するなど南都とも縁が深い。

残念ながら原在照筆本の行方が知られない今、大乘院庭園を復元的に考察するうえにおいてもっとも参考にすべき絵画資料はこの国会図書館本であろう。本図は軸装もされず、鑑賞の対象というよりも資料として残すことに主眼を置く絵図面であり、今後の旧大乘院庭園の整備にも大いに資することだろう。資料を蒐集し本図の模写を命じた小澤の慧眼には敬服せざるを得ない。

大乘院四季真景図の世界　本稿では新出の作例とともに、これまで顧みられなかった国会図書館本を簡単に紹介してきた。原在照の描いた原本をもとに隆温と宮崎は大乘院庭園図を量産したのだろう。宮崎は小澤の指示もあり原在照筆本と記憶を頼りに大乘院庭園の在りし日の姿を自覚的に記録したようである。それに対して、隆温筆本の制作背景は今のところよくわかっていない。行方不明の作例の探索とともに今後の根本的な研究課題である。

(児島大輔)